

# 茶園雑草防除に関する研究 (第7報) 幼木園における時期的雑草量と次年度収量との関係

吉田三郎・田中勝夫

(茶業試験場枕崎支部)

YOSHIDA, S. and TANAKA, K.

Studies on the Weed Control in Tea Garden

(VII) Relation between the Seasonal Weeds and the Yields of the Next Year in Young Tea Garden.

茶園雑草防除においては幼木期間の株際除草が特に問題となる。定植後3カ年間の除草剤5種類2水準3ブロック制乱塊法で年4回(3, 5, 7, 9月)株際に連続散布し、各時期雑草量と次年度収量との関係を検討した。

### 材料と方法

供試量はCAT20, 30, DCPA17.5, 35, PCP尿60, 120, 塩素酸ソーダ10, 30, 2.4D10, 3030成分量g/aとし、対象を放任と標準区とした。供試品種はべにかおり、土壌は黒色火山灰土である。散布方法は如露で20l/aの水で散布した。Plotの面積は3.6m<sup>2</sup>で内2m<sup>2</sup>に散布し、1畦ボーダを設けた。

### 結果と考察

散布後1, 2, 3年目と各翌年収量との関係ならびに散布後3カ年間の各時期別雑草量のブロック間平均値と各翌年の収量との関係等につき約20組の共分散分析を行ないそれらの関係を検討した。

図1では2年目の時期別雑草量と翌年収量との関係を示したが、1年目と3年目の前記関係と同様に回帰、相関関係がみられずF, F<sub>0</sub>値に差があるのみであった。しかし、各ブロックを平均した3年間の雑草量について前記関係について検討すると、4~5月雑草量と10~11月雑草量とは関係なく、6~7月雑草量との間に $\gamma = -0.573$ , bE = -0.522, 8~9月雑草量との間に $\gamma = -0.853$ , bE = -1, 895で共に有意になって雑草害とみられた。またこれは、年間合計雑草量との関係とよく似たものとなった。

幼木期間の年次別(樹令別)な時期的雑草量と翌年の収量との関係がみられなかった。これは雑草量の不均一などでキャッチ出来にくいものであらうと思われ、今後、雑草害を究める場合にはPlotの大きさよりもブロック数を多くとってその平均値等で検討する方がよいのではと思われた。

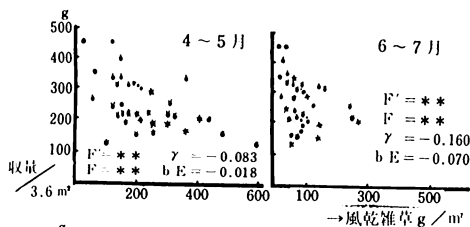


図1 処理2年目の時期別雑草量と次年度収量

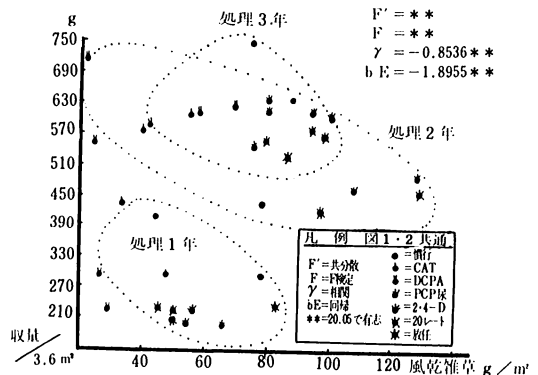


図2 処理1~3年目の8~9月雑草量と2~4年目収量